

海外インターンシップ	
リキャストによる誤りの訂正と学習者の認識 ストーリーナレーションタスクにおける助詞と動詞部分の誤りを対象として	
菅生 早千江	国際日本学専攻
期間	2010 年 11 月 7 日～2010 年 11 月 22 日
場所	アメリカ ニューヨーク州
施設	ヴァッサー大学

内容報告

1. インターンシップの目的

第二言語習得研究の中で、誤りをどのように訂正するかは主要な論点の一つである。リキャストは、発話の誤りに対して自然に言い直して正用を提示するフィードバック手法である。リキャストについては、教室で教師が多用する手法であるが学習者は訂正されたことに気づいていない（Lyster&Ranta, 1997）という報告を契機に、効果と気づきを検証する研究が数多くなされている。しかし、英語やフランス語を対象とした研究が中心で、日本語を対象とした研究は限られている。

報告者は日本語教師としての経験から訂正フィードバックをテーマに修士論文をまとめた。菅生（2008）では、誤用が助詞か動詞かによってリキャストを受けた学習者の反応が異なるため、助詞に対するリキャストは学習者に気づかれていない可能性があることを報告した。報告者は博士論文では、誤りを訂正された時の学習者の認識を明らかにし、欧米語とは類型論的に異なる日本語を対象とした場合、リキャストの働きかけ方も、欧米語を対象とした研究の知見とは異なることを指摘したいと考えている。さらに、どのように訂正することが効果的なのかを検証することを計画している。

そこで本インターンシップでは、学習者のリキャストの気づきが助詞と動詞部分で異なるかについて、菅生（2008）とは条件を変えて探ることを研究課題とした。そのため 2 回の教壇実習でタスクを実施しながら、誤りにはリキャストで対応して反応を観察した。さらに受け入れ校の承諾を得て、授業時間外に学習者の協力者を募り、一対一でタスクを実施し刺激回想インタビューを行った¹。

2. インターンシップの概要

2.1. 実習授業

2.1.1 対象者と実習授業数

3 年生 8 名のクラスで実習を行った。レベルは中級

前半である。50 分授業を週 3 回実施しているうちの 2 コマで、通常の授業とは独立に実習授業を行った。

2.1.2 学習目的と活動、および手順

授業における学習目的は初級文型の運用練習とし、格助詞と動詞部分を操作して物語を口頭で叙述するストーリーナレーションを行った。タスクシートは、10 数枚の絵に英語訳・空欄を設けた日本語の叙述文、日本語の語彙を配置したものを用いた。

実習 1 では、SPOT テスト²、および助詞と動詞部分の口頭産出を目的としたストーリーナレーションタスク「白雪姫」を行った。実習 2 では、動詞の適切な形と補助動詞の口頭産出を目的とした「シンデレラ」のストーリーナレーションタスクおよび復習クイズを行った。発話の誤りにはリキャストで対応した。2 回とも授業後にアンケートを実施した。

2.2 一対一セッション

2.2.1 参加者

ボランティアを募集し、7 名の協力者（4 年生 5 名、3 年生 1 名、2 年生 1 名）を得て実施した。

2.2.2 目的と活動、および手順

セッションの目的と活動、誤りに対するリキャストは、2.1 で記述した実習授業と同じである。協力者と一対一で約 1 時間のセッションを持った。SPOT テストを実施し、ストーリーナレーションタスク「舌切すずめ」³は、まず英語であらすじを聞かせてから、助詞と動詞を含む部分の口頭産出を目的として実施した。次に、録画ビデオを見せながら刺激回想インタビュー、最後に文法の復習を行った。

2.2.3 刺激回想法インタビュー

刺激回想法は、タスクを遂行している間の思考プロセスをデータとして引き出す内観法の一つである（Gass&Mackey, 2000）。Mackey, Gass&McDonough（2000）の実施方法に従い、報告者と一対一で行っているタスクをビデオ録画し、タスク終了後にビデオを再生しながら、協力者にリキャストを受けた場面（一人約 10 数か所）で何を考えていたかを英語で語ることが求めた。

3. 研究課題に対する結果と考察

授業とセッションの録画資料は本報告時点で分析途中であるため、得られた傾向のみ記す。

3.1 実習授業におけるリキャストされた文法項目とリキャストの認識

実習 1 では、助詞へのリキャストは反応から判断する限り、気づかれていないものも多く見受けられた。一方、実習 2 における、動詞の活用と補助動詞の誤りに対するリキャストは、学習者にも認識されていたように見受けられた。

3.2 一対一セッションにおけるリキャストされた文法項目とリキャストの認識

刺激回想インタビューでは、助詞と動詞部分とでリキャストの認識に関するコメントが異なった。補助動詞については、「どういう場面で使うのかがわかった」というコメントが多かった。一方、助詞の誤りに対してリキャストしたものは、訂正には気づいても文法が理解できたというコメントは少なかった。また、助詞と動詞など二つの誤りを一つのリキャストで訂正している場合、コメントでは動詞など内容語の方を訂正されたことだけに触れ、助詞へのリキャストについて言及しない例が散見した。

3.3 考察

動詞部分、特に補助動詞へのリキャストは、意味と機能を文脈の中でマッピングする機会を提供するもので、効果的に働きかけるようである。助詞の誤用に対するリキャストは場面やその他の要因により気づかれにくい傾向がある。このように助詞と動詞とで認識が異なるのは、項目の卓立性の違いによる可能性がある。加えて、助詞については、リキャストで訂正しても文法ルールの再構築には至らないことも考えられる。助詞と動詞の二つの誤りをひとつのリキャストで訂正した時に、助詞の訂正が認識されにくいのは、内容を担う語の意味処理に認知資源が割かれることに起因するという解釈も可能である。

4. インターンシップの成果と意義

対象者数の少ない小規模のデータであることは考慮しなければならないが、先行研究に照らして、次のような興味深い傾向が得られた。動詞部分の誤用に対して行うリキャストは、気づきやすさ、使用ルールの発見の両方の点で効果的に働きかける様子が見ええた。一方助詞へのリキャストは、気づきを得にくく、ルールの再構築に結びつかない可能性がある。助詞と動詞を一度に訂正すると、動詞部分の方が意識化されやすい傾向が見られた。このような傾向についてデータ分析・考察を行い、日本語教育学会、言語科学会、第二言語習得研究会で発表するほか、それぞれのジャーナルにも投稿する予定である。新奇性のある結果でもあるので、TESOL Quarterly など、英語のジャーナルにも投稿したい。

菅生 早千江（すごうさちえ）／お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科 国際日本学専攻

今回の結果を、3つの独立した研究論文として投稿し、またそれぞれを独立した章として博士論文の構成に取り入れたい。今後は、助詞と動詞に対するフィードバックの効果を実験的に検証し、総合的に考察することで博士論文全体をまとめたい。

本インターンシップの意義を述べる。訂正フィードバックの研究は、教育現場の協力なしには進めることができないが、一般的に教育機関でこうした協力を得ることは容易ではない。本海外インターンシップは、研究フィールドを確保する段階での困難点を解決する、必要性の高いプログラムであった。また、私見であるが、アメリカの大学では学内の手続きを踏むことで、調査者を教育現場に受け入れる体制が整っているようにも思われた。今後もアメリカで調査研究を行う機会があるかもしれないが、どのように進めたらいいのか、一端を知ることができた。

最後に、一教師としての振り返りを述べる。学習者から、誤りにフィードバックしてもらうのはとても勉強になる、という意見が多く聞かれたことは嬉しいことであった。また、アドバイザーから「タスク実施の前に、学習者をリラックスさせるための (ice breaking の) 時間を設けてもよかったのではないかと」のご意見をいただいたことも有難く思っている。

謝辞：受け入れていただいたヴァッサー大学中国語日本語学科のドラージ土屋浩美学科長、松原優子先生他学科の教員の皆様に、謹んで感謝の意を表し、ここにお礼申し上げます。

注

1. 実習に先立ち、9月に Research Proposal を大学の Institutional Review Board に提出し審査を受けた。
2. SPOT は筑波大学留学生センターが開発した、外国人日本語学習者のレベルチェックを目的としたテストである。
3. ウェブサイト「デジタル絵本」のイラストおよび英語音声、管理者の許可を得て使用した。(http://www.e-hon.jp/)

参考文献

- 菅生早千江 (2008) 「受益表現の誤用と訂正フィードバックに対する中上級日本語学習者の反応ーリキャストと自己訂正を促す介入の比較ー」『日本語教育』139, 52-61.
- Gass, S. M., & Mackey, A. (2000) *Stimulated Recall Methodology in Second Language Research*. London: Lawrence Erlbaum Associates.
- Lyster, R., & Ranta, L. (1997) Corrective feedback and learner uptake: Negotiation of form in communicative classrooms. *Studies in Second Language Acquisition*, 19, 37-66.
- Mackey, A., Gass, S., & McDonough, K. (2000) How do learners perceive interactional feedback? *Studies in Second Language Acquisition*, 22, 471-497.